

三貫梨遺跡

— 第2次発掘調査 —

1987

長岡市教育委員会

序

この調査報告書は一般国道352号改良工事に伴い、昭和60年度に引続き県土木部より委託を受け実施した「三貫梨遺跡」の第2次発掘調査の記録である。

第2次発掘調査地は第1次発掘調査地に隣接する地で、今回の発掘調査から中世の陶磁器や建物跡等が確認され、第1次調査の結果と合わせ中世の人々の生活や文化の一端が明らかになり、貴重な成果をおさめることができた。

この記録が地域の文化財に対する理解と認識を深め、また学術研究のために活用され役立つことを願っております。

なお、今回の調査に当たり、多大な御援助、御協力を頂いた県教育委員会はじめ県土木部監理課、長岡土木事務所工務第1課および関係各位に対し、心からお礼を申し上げます。

昭和62年3月

長岡市教育委員会

教育長 丸 山 博

例 言

1. 本書は国道352号の改良工事に伴って実施した新潟県長岡市栖吉町字清水田(通称「三貫梨」)に所在する三貫梨遺跡の第2次発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は新潟県の委託を受けて、長岡市教育委員会が調査主体となって実施した。
3. 遺跡・遺構の写真撮影・測量及び遺物の整理から図版の作成まで、駒形を中心に調査従事者の全員が当たった。
4. 出土陶磁器をはじめ、出土品の多くは手塚直樹氏(鎌倉考古学研究所)より産地同定および時間的同定についての御教示・御指導をいただいた。
5. 本書は整理調査補助員の助けを借りながら、駒形が執筆したものである。
6. 挿図のうち、断面図わきの数字は標高を示す。単位はメートルである。
7. 発掘調査から本書の作成まで、次の方々や機関をはじめ、多くの方々から御教示・御指導・御協力を賜った。衷心からお礼を申し上げます。(五十音順・敬称略)
阿部洋輔 甘粕健 家田順一郎 稲川明雄 金子達 坂井秀弥 寺崎裕助 戸根与八郎 田村裕 中島栄一 中野豈任 鳴海忠夫 藤木久志 若松茂
栖吉町町内会 新潟県長岡土木事務所

8. 第2次発掘調査の体制

- 調査主体者 長岡市教育委員会(教育長 丸山 博)
- 調査担当者 駒形敏朗(長岡市教育委員会)
- 調査補助員 小林義広(昭和61年6月3日~11月5日=うち8・9月を除く)
- 整理調査補助員 小熊博史(新潟大学研究生)、富田和氣夫・小林隆幸(新潟大学学生)
- 調査事務局 田中岬(長岡市教育委員会社会教育課長)、清水正一(同課課長補佐)
鈴木孝行(同課庶務係長)、芳賀代志榮・松田英也(同課課員)

目 次

I. はじめに	1
1. 調査に至るまで	1
2. 調査の経過	1
II. 環 境	2
III. 遺 構	4
1. 第1号建物跡	4
2. 第2・3号建物跡	4
3. 井戸跡	6
4. 堀 跡	6
IV. 遺 物	9
1. 中国産陶磁器	9
(1)青 磁	(2)白 磁
(3)染め付け	(4)天 目
2. 国内産陶磁器	11
(1)瀬戸系陶器	(2)珠洲系陶器
(3)常滑系陶器	
3. かわらけ	16
4. 瓦質雑器	16
(1)土風呂	(2)手あぶり
(3)火 鉢	(4)瓦 器
5. 石製品	17
(1)硯	(2)砥 石
(3)石 皿	
6. 金属製品	18
7. 木製品	18
8. 銭 貨	19
9. 近世陶磁器	19
V. ま と め	20

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	遺跡周辺の地形図	3
第3図	遺構全体図	4・5
第4図	第1号建物跡	5
第5図	第2・3号建物跡	7
第6図	柱穴・井戸跡・堀跡	8
第7図	青磁・白磁・天目・瀬戸系陶器	9
第8図	珠洲系陶器	12
第9図	珠洲系陶器	13
第10図	珠洲系陶器	14
第11図	かわらけ	15
第12図	土風呂・手あぶり・火鉢・瓦器	16
第13図	硯	17
第14図	砥石	17
第15図	銅製掛け金具	17
第16図	木製品	18
第17図	銭貨	19

図 版 目 次

図版第1図	遺 跡	図版第2図	調査風景
図版第3図	遺物出土状況	図版第4図	遺 構
図版第5図	柱 穴	図版第6図	井戸跡・堀跡
図版第7図	中国・国内産陶磁器	図版第8図	珠洲系・常滑系陶器
図版第9図	かわらけ・瓦質雑器・石製品・ 金属製品	図版第10図	木製品・柱・近世磁器

I. はじめに

1. 調査に至るまで

三貫梨遺跡は国道352号のバイパス工事に先立って遺跡の一部を発掘調査して、記録を保存することになった遺跡である。昭和60年度には「遺跡カード」で城跡とされていた箇所を対象に調査を実施し、調査地が城跡ではなく中世の墳墓群であることを確認した。バイパス工事の関係で昭和60年度の調査は墳墓が存在した地域に限られた。このため、以前から珠洲系土器が発見されている「大銀杏」付近の発掘調査は昭和61年度に行うことになり、昭和60年度調査を第1次、翌61年度調査を第2次調査と分別した。第2次調査の対象地は第1次調査地よりも東の栖吉寄りの地で、樹齢数百年の「大銀杏」がそびえている。なお、第2次調査に先立って、昭和60年9月に新潟県教育庁文化行政課戸根与八郎主任の指導で実施した試掘調査で珠洲系陶器、青磁の香炉破片などと柱を検出し、この付近に館跡の存在が予測された。

2. 調査の経過

三貫梨遺跡の第2次調査は6月3日に現場事務所を開設し、調査機材等運び込むことから始まった。調査対象地は試掘調査で遺物が出土した範囲および地形等を考慮して、文化行政課戸根主任のご指導で伝説の大銀杏の付近を中心に設定した(第2図)。また、調査地が水田のため、調査用排水路を設ける。そして、5日の朝には調査に従事する者が全員集まり、社会教育課長の挨拶を受けた後、調査上の注意事項等(安全衛生を含む)を確認し、約2ヶ月間にわたる調査にはいる。調査グリットは20mごとに置かれている国道法線の中心杭を利用して設定した。グリット名称は中心杭の番号をそのまま使用した。

調査は10~30cmの表土を除去して、地山面での遺構確認作業を第一にして始める。発掘残土はクローラードンプ(図版第2図)と一輪車で排出する。6月中旬には試掘調査で柱を検出した49G付近の遺構確認に入り、柱および柱穴が49Gを中心に確認され始める。下旬には第1・2号井戸跡のプランが確認され、手掘りによる発掘を行う(図版第2図)。7月上旬に表土の発掘が終わり、遺構の発掘班と合流する。7月8日、7間×3間の東西に長い掘立柱の建物跡を、48Gから49Gにかけての範囲で想定する(第1号建物跡)。中旬に三貫梨の屋敷内を区画する東・西の堀跡のプランが確認され、これを発掘する。7月15日、戸根主任から現場で多岐にわたってのご指導を受ける。特に井戸跡の発掘方法が危険であるとの指摘を受け、未発掘の第3号井戸跡の発掘は重機を使用して行う。遺構の確認・発掘は7月下旬には終わり、遺構群全体の写真撮影および平板測量を28日までに終え、29日には次の調査地(横山遺跡)へ調査機材を移動し、ここに三貫梨遺跡第2次調査を完了する。

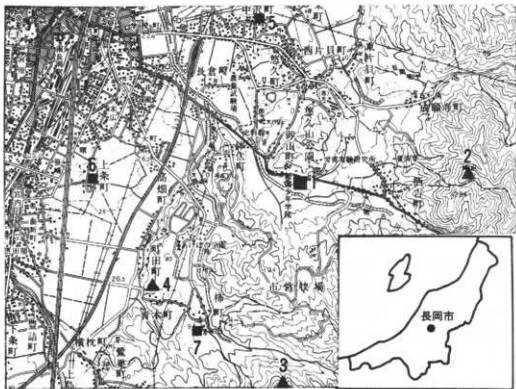
II. 環 境

三貫梨遺跡が所在する長岡市栖吉地区が、中世の中越地方に勢力を誇った古志長尾氏の根拠地であり、前面に立ちふさがる悠久山によって天然の要害のようになっていることなどは、既に第1次調査の報告書〔註〕で触れた通りである。ここでは試掘調査で得られた情報を中心に第2次調査地のようすをみることにしよう。

第2次調査地は第1次調査地より東に寄ったところで、第1次調査地の北を流れる沢の谷頭に近く、悠久山の南の裾が迫っているところである。ここには伝説に登場する大銀杏がそびえ、東隣には地藏尊をまつた堂がある。大銀杏の北側や地藏堂の東側には沢が入り、大銀杏から南の第2次調査地にかけての地域が周辺よりも一段地形的に高くなっていると、試掘調査で予測された。大銀杏付近の水田から珠洲系陶器などのカワラカケが採集されている。

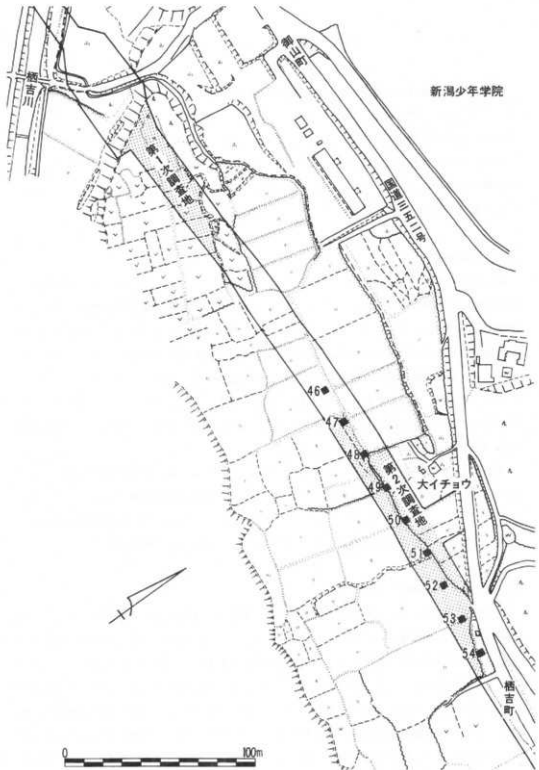
なお、大銀杏には三貫梨に館を構えた金原大膳の女で、彦佐親王の乳母が親王のために立てた杖が銀杏になり、乳を出したという、話が伝わっている。

註 胸形敏朗他「三貫梨遺跡—第1次発掘調査—」長岡市教育委員会 昭和61年



第1図 遺跡位置図 (1/50,000 長岡)

1. 三貫梨
2. 栖吉城
3. 柿城
4. 町田城
5. 中沢城(館)
6. 上條城(館)
7. 柿館



第2図 遺跡周辺の地形図

III. 遺 構

第2次調査で検出した遺構は掘立柱建物跡1、礎石建物跡2、柱穴約470(柱の一部が残っていた柱穴27)、井戸跡3、それに堀跡2などがあり、柱穴の一部が第2号堀跡より東にある外は、約86mの距離がある東西の堀跡に囲まれた中にあった(第3図)。

なお、第3図で柱および礎は黒く塗り、柱が残っていた柱穴はP、柱穴でも第1号建物跡に関係するものと、第6図で示したものはP98などと番号を貼付して、礎と分別した。また、第4・6図での柱の位置は縦線のスクリーントーンで示した。

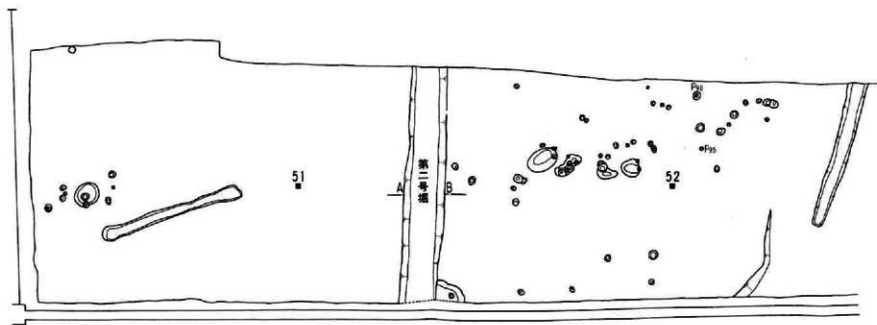
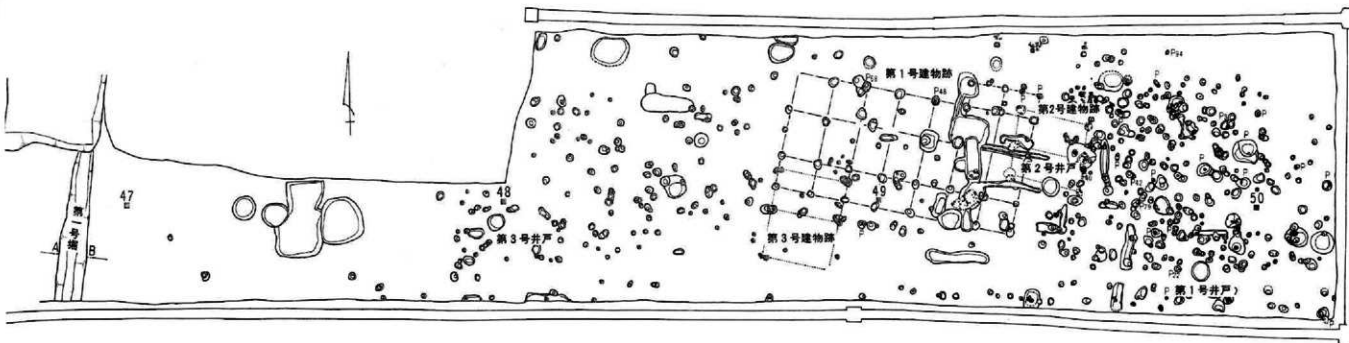
1. 第1号建物跡(第4図)

48・49Gを中心に約470もの柱穴があるが、建物を想定できたのは48・49Gに位置する掘立柱式の第1号建物跡だけである。建物は桁行が7間、梁行が3間の東西棟建物である。この建物の北東の北辺に梁行1間、桁行2間の張り出しを加えることもできよう(第4図)。第1号建物跡の柱間寸法は桁行が1.6~1.8m、梁行が南から1.6m・2.5m・2mと、不揃いである。第1号建物跡を構成する柱穴は直径25~40cm、深さ40~80cmの規模のものがほとんどである。この内、P48・P68の2本の柱穴の上面に炭化材が横たわっていた(図版第5図・第6図)。これは焼け落ちた柱材かと思われる。P48・P68の焼けた柱の他には、第1号建物跡の柱穴からは柱そのものの出土はなかった。

また、第1号建物跡の東隣りに第2号井戸がある。この井戸跡の付近を建物の水屋として検討したが、柱穴の対応関係にかなり無理があること、柱間寸法が建物のそれと大きく異なることなどから井戸を建物に取り込むことはしなかった。しかし、第1号建物跡と第2号井戸跡との関係は、屋敷跡を復元する際には考慮しなければならない事柄であろう。

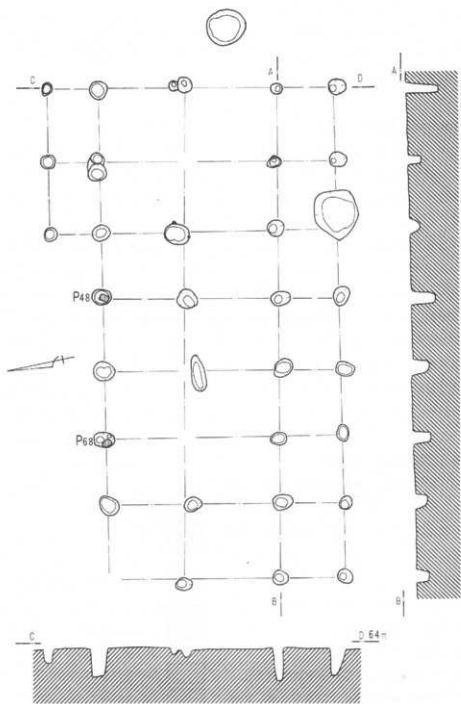
2. 第2・3号建物跡(第5図)

この2軒の建物はいずれも礎石柱の建物跡で、第2号は49Gで第1号建物跡の東辺と、第3号は48Gで第1号建物跡の南西でそれぞれ重複していた。建物の規模は第2号が桁行2間(3.6m)×梁行1間(3.6m)、第3号も桁行2間(4.8m)×梁行1間(3.6m)で、若干第3号の方が大きい。なお、2軒の桁行の柱間寸法は、第2号が約1.8mづつで、第3号の柱間は北側で2.3m、南側で2.5mを測る。第2号の礎石は高さ5cm、径40~70cmの不整形円形を呈する基壇上の数個の小石である。基壇は地山の黄褐色土と表土の黒色土とを交互に叩き締めた版築であった。第3号は人頭大の礎を2~3個並べているだけで、簡素な建物と思われる。また、第3号の桁行の中柱の礎石は柱穴の中にあり、この中柱は第3号建物として使用



第3図 遺構全体図





第4图 第1号建物跡

されず、4本の柱だけだった可能性もある。

なお、第2・3号建物跡は三貫梨で多い柱穴で構成する掘立柱式の建物でなく、大銀杏の東隣りにある地藏堂に建物の規模が類似していることなどから、礎石建物跡は近世において地藏堂の前身だった可能性も考えられている。

3. 井戸跡 (図版第6図 第6図)

三貫梨の屋敷内の3本の井戸跡はいずれも口径が1mに満たない素掘りの井戸であった。第1号は49Gの東南に位置し、周囲にはP22をはじめ柱穴が多くあった。深さ約1.7mの井戸の底には杉やシダ類などの植物遺体が落ち込んでいる。この中に板草履(第16図1)等の木製品が混じっていた。

第2号は第1号建物跡との関係が考慮される位置にあり、深さ約2.7mと3本の井戸の中で最も深い井戸である。井戸内の底面から1mほどの上部までの間には、梅・柿・胡桃・栗などの種子や、杉・松・シダ類などの植物遺体が充満していた。その量は $34 \times 54 \times 15$ cmの立方体容器で6箱にもなった。この中には建物の材と思われる木製品も多量に含まれていた。多量の建物の材が井戸内にあったということは、焼失したと思われる第1号建物跡との関係をなお一層考えなければならないだろう。

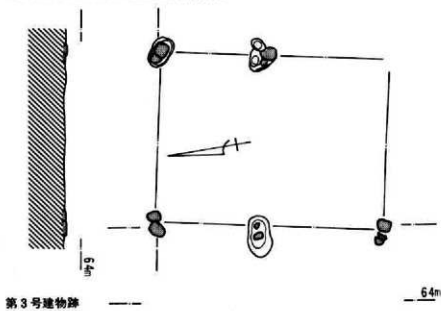
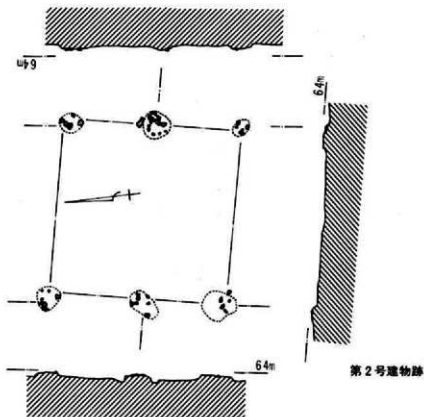
第3号は48Gの杭の近くに位置する井戸で、井戸内には第1・2号のように植物遺体は見られなかった。ただ、常滑系陶器の製の破片と、北宋の嘉祐通宝が1枚出土したただけである。

4. 堀跡 (図版第6図 第6図)

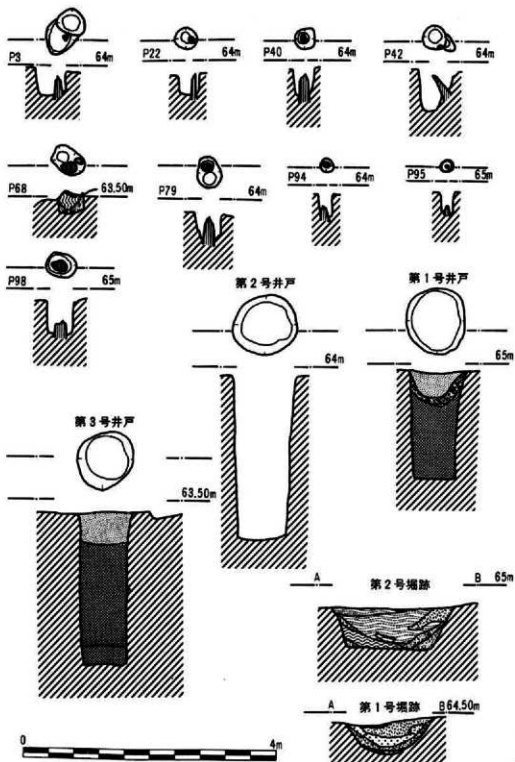
三貫梨の屋敷を囲むと思われる東西の堀は、調査も終わりに近くなった頃に発見された。2本の堀ともに地山面では難しく、調査用排水路の断面を再検討した際に発見された。これはいずれも地山土が混じった土砂が堀の上層から下にかけて入っているの、地山面との違いを判断できなかったためである。この地山混じりの土砂は堀内に厚く堆積しており、自然に入り込んだとは考えにくい。むしろ、屋敷内側に土塁の存在が推測され、三貫梨の屋敷を惣地する際に土塁を取り壊して堀に埋めた土砂と考えることも出来よう。堀の深さが50~60cmと浅く、堀幅も飛び越えられるようなものであることから土塁の存在が考慮される。

第6図の凡例

柱	
	明褐色土(焼土混り)
	黒褐色土
井戸跡	
	茶褐色粘質土(炭化物混り)
	黒褐色粘質土
	暗褐色粘質土
堀跡	
	茶灰色粘質土(地山混り)
	白灰色粘質土(地山混り)
	暗灰色粘質土
	黒色砂質土
	灰色砂質土



第5图 第2・3号建物跡



第6图 柱穴·井尸跡·掘跡

IV. 遺 物

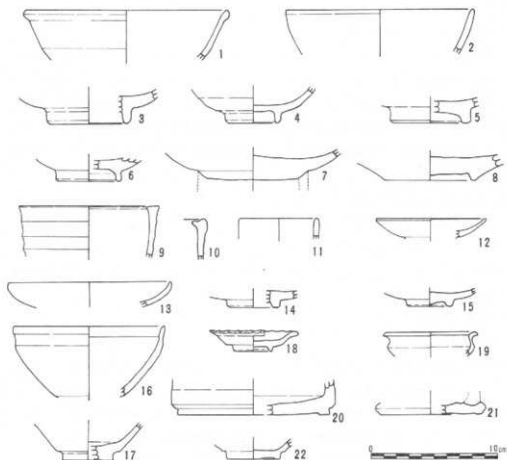
第2次調査で出土した遺物は中世の青磁や瀬戸焼きなどの国内外産の陶磁器が主体的で、外に瓦質雑器、石製品、金具、それに井戸跡からの木製品がある。これらは中世のもので、礎石建物と同じ近世の産は有田焼きなどの磁器類と寛永通宝だけで、出土量も多くはない。

1. 中国産陶磁器 (図版第7図1～33 第7図1～17)

三貫梨で出土した中国陶磁器は青磁・白磁・染め付け・天目の4種類で、中でも青磁の碗の出土量が群をぬいていた。

(1) 青磁 (図版第7図1～19 第7図1～11)

出土した青磁の種類と量は(破片点数であるが)碗が82点、盤が1点、香炉3点それに器台



第7図 青磁(1～11)・白磁(12～15)・天目(16・17)・瀬戸系陶器(18～22)

の4種類87点である。第7図1～7（図版第7図1～14）は青磁の碗で、胎土は灰色で、薄緑色の釉がかかっている。1・2は口縁から体部の破片で、1は口縁がやや外反し、玉縁状になっている。三貫梨の青磁は玉縁状の口縁をもつことが多い（図版第7図3～8）。5は内底面にスタンプ文がみられるもので、15世紀段階のものであろう。1・2も内底面にスタンプ文が入ることが多い。図版第7図1・2は外面に線彫りによる肉厚風の蓮弁文が付いた碗である。この手法は15世紀前半のものと考えられている。小さい破片であるが、15世紀中ごろと思われる平面的な線彫りによる雷文と蓮弁文の碗も出土している。第7図7はこれまでの碗より幾分大きい碗で、高台が剥落している。第7図8（図版第7図15）は高台の外側が内側に傾斜している盤で、高台の様子から15世紀中ごろと思われる。第7図9（図版第7図16）は15世紀段階の筒香炉で、内面の軸は口縁部だけにかけられている。10（図版第7図17）は外面に算木文がみられる香炉である。図版第7図19は華瓶もしくは香炉を載せる透かし彫りの器台である。11（図版第7図18）は小さい碗か、香炉で、香炉とすれば先の器台に入るようなものである。

(2) 白磁（図版第7図20～28 第7図12～15）

三貫梨出土の白磁は皿9（図版第7図20～28 第7図12～15）、菊皿1（図版第7図27）、角環1（図版第7図28）の11点である。皿は薄手に作られており、口縁はかなり先細り（第7図12・13）で、浅い。また、高台（第7図14・15）はきれいに面取りされている。菊皿は内底面に菊の型押しがある。角環はやや波状の口縁より若干下から瓶に面取りされている。菊皿、角環それに皿の一部は白磁とはいえ、若干茶色がかっていた。白磁はいずれも15世紀段階のものである。

(3) 染め付け（図版第7図29）

三貫梨出土の中国産と思われる染め付けは、図示した茶碗の底部破片と、外にこれも茶碗と思われる口縁部の1点があるだけで、数は少ない。底部の高台は削り出しかと思われる。いずれも白地にコバルト色の濃淡を使って文様が描かれている。三貫梨出土の染め付けは2点とも15世紀後半と思われる。

(4) 天目（図版第7図30～33 第7図16・17）

キメが細かく堅くしまっている胎土に、鉄釉がかかっている。胎土の色調は灰色が基調で、中には白に近い灰色もあった。鉄釉のかかりは、内面は内底面にまで及んでいるが、外面は体下半までで、底面には及んでいない。第7図16は底部の高台部分が欠けている破片で、口縁の下に指先の押えによる整形で頸部のクビレが作出されている。第7図17の高台は削り出しである。なお、天目の出土量は9点で、同一個体と思われるものも含んでいる。

中国産の陶磁器はこれまでも触れてきたように、15世紀の前半のもの（図版第7図2の青磁の碗）から後半の染め付けまで、15世紀段階のものが主体的である。

2. 国内産陶磁器（図版第7図34～52、図版第8図 第7図18～22、第8～10図）

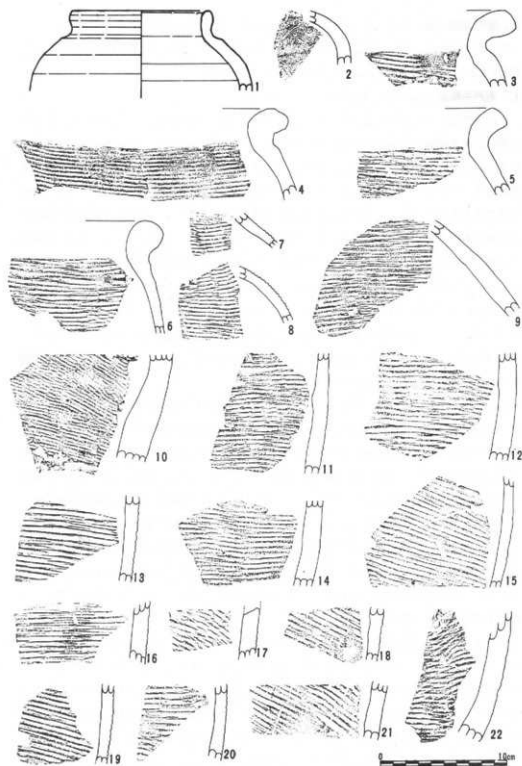
国内産陶磁器には瀬戸系陶器、珠洲系陶器、常滑系陶器がある。中でも珠洲系陶器の出土量が112と、三貫梨出土の陶磁器では最も多い出土量である。

(1) 瀬戸系陶器（図版第7図34～52 第7図18～22）

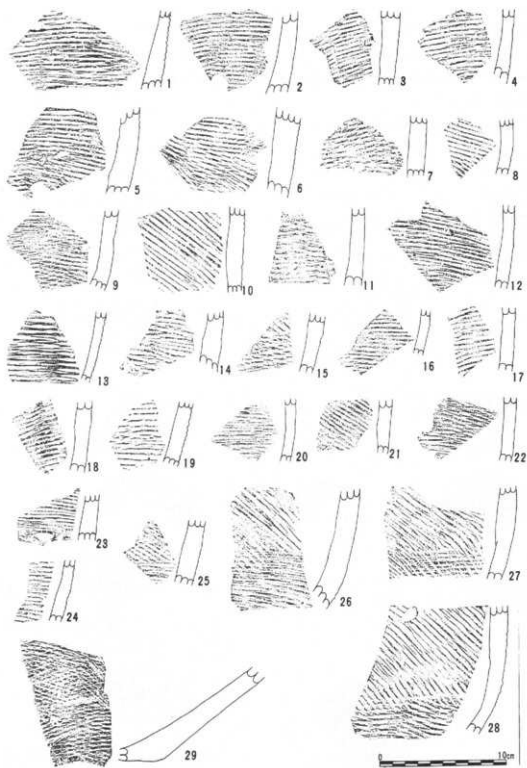
三貫梨で出土した瀬戸系陶器は、淡い緑色の釉（灰釉）がかかり、キメが粗い胎土のものが多い。第7図18（図版第7図34）は口縁を大きく外反させ、さらに口唇部を外方に耳状に波をうたせている菊皿で、口縁の一部を少し欠けただけのものである。灰釉は内外底面や高台にまで丁寧にかかり、釉のヒビとあいまって淡い緑色を醸し出している。瀬戸の菊皿の出土はこの1点だけである。この菊皿は15世紀段階のものであろう。図版第7図35は口縁部だけに釉をかけておく「緑釉の小皿」で、室町時代の特徴を示す15世紀のものである。図版第7図36～43は平鉢で、25点出土の瀬戸系陶器の内14点と、過半数以上の出土例の器形である。36・37は口縁部破片で、他は体部破片である。平鉢の口縁部内面には蓋受けのような凸体がか1本回っている。外面はこの凸帯のところから外方に折れ曲がっている。43は内面にオロシ目が入っている体下部の破片である。三貫梨出土の平鉢は41にみられるように体下半にまでは灰釉がかかっていないものが多い。平鉢も15世紀段階のものである。なお、瀬戸の碗は小さい体部破片が1点出土している。

第7図19（図版第7図45）は大きく「く」字に折り曲がっている香炉で、釉の塗布は外面が残存部全面に、内面は口唇部だけである。香炉は15世紀段階と思われるこの1点だけである。第7図21（図版第7図46）は内面に体部への立ち上り部分が、剥落した痕跡がある仏華瓶の底部破片である。底部の切り離しは回転糸切りによる。なお、灰釉は内面中央と外面に点々と、それも釉がこぼれたかの様に付いているだけである。図版第7図47は筒状の破片で、灰釉が外面だけで、内面にかかっていないことから大型の仏華瓶と思われる。仏華瓶の出土はこの2点である。第7図20（図版第7図44）は内底面の縁と外面の一部に釉がかかっている筒状の壺である。高台は浅く、削り出しである。この壺は胎土のキメが粗く、灰色を呈し、かかっている釉も薄い緑色であることなどから瀬戸焼きに近いものと考えられる。壺はこの外に1点あるだけである。

これまでは瀬戸系陶器でも灰釉のものをみてきたが、三貫梨では鉄釉の瀬戸天目や片口の鉢も出土している。天目（図版第7図48～50 第7図22）は8点出土している。瀬戸天目は外底面にまで鉄釉がかかっている。また、胎土は肌色で、キメが粗い。中国産の天目は鉄釉の塗布面および胎土に違いがみられる。この瀬戸天目は15世紀段階の産である。片口の鉢（図版第7図51・52）は口縁が垂直に立っている。片口は注口を半分に切ったように細長い。胎土は他の瀬戸系陶器と同じく肌色もしくは灰色で、柔らかく、キメも粗い。鉄釉の塗布面は外面では口縁直下までで、内面は残存部全面に渡っている。



第8图 珠洲系陶器(壺·甕)

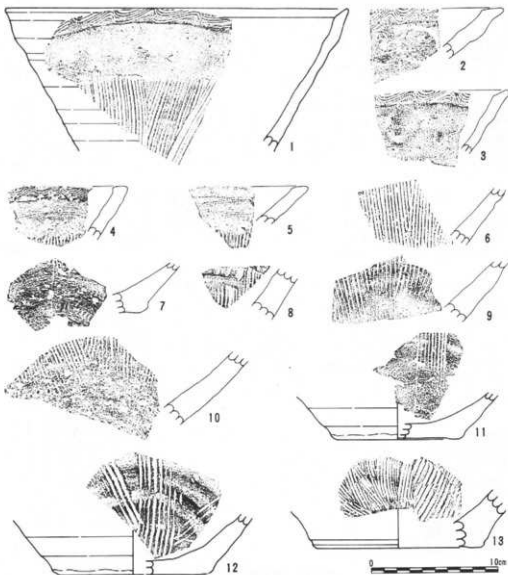


第9图 珠洲系陶器(甕)

(2) 珠洲系陶器 (図版第8図1~21 第8~10図)

黝灰色を呈し、叩き締め技法の痕跡を残し、珠洲焼きに類似し、新潟県内から多くの出土例がある中世の陶器をここでは珠洲系陶器とした。中には珠洲焼きそのものも含まれている可能性もある。

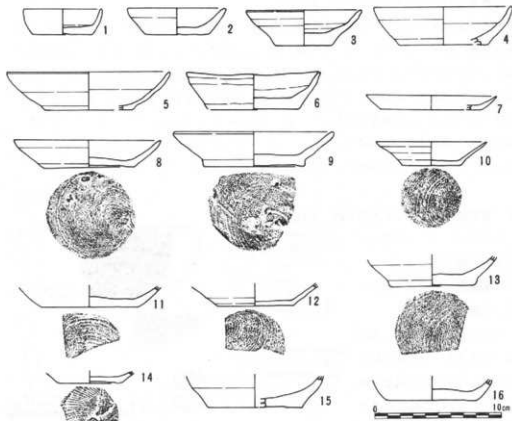
第8図1 (図版第8図1) は口縁が短く立ち上がる器形の壺で、いわゆる菓壺の類であろうか。叩き締めの痕跡はみられない。2は壺の肩の破片で、橋描きによる波状文がある。壺はこの外に12点出土している。壺としたうち、胸部破片については叩き締め痕跡がないものを以て壺とした。次に述べる甕の範疇にいれた叩き目の土器で、壺の仲間があると思われるが、



第10図 珠洲系陶器(摺鉢)

ここでは叩き目の有無によって、壺と甕とに分類した。甕と思われる破片は70点である。

第8図3～6は甕の口縁から肩にかけての破片で、3・4は口縁がやや玉縁状を呈し、「く」字状に外反する器形である。5も「く」字状に外反する器形であるが、口縁が若干角張っている。6の口縁は玉縁状を呈するが、3～5のように肩が張らずに、ダラリと下る器形である。7～9は条線状叩き目痕が外面に残っている肩付近の破片である。珠洲系陶器の甕に分類した破片はこのように条線状叩き目痕が外面に、無文の叩き目痕が内面にみられる。第8図10～第9図は外面に条線状叩き目がある甕の胴部もしくは底部の破片である。叩き締め具の条痕にバラエティーがあるが、第9図29（図版第8図10）で代表されるように胴部下半はかなり条線が右下に傾いている。そして、底部直上の条線は横になっていることが多い。これから考えると、第9図25～28（図版第8図7～9）は底部近くの破片と思われる。27は条線が重なっている部分の内面に粘土の齧目がみられる。これは別作りの胴と底をつないだことを示しているのであろうか。それも乾燥があまり進まない時につなぎ、粘土を叩いたのであろう。また、29の内面はトロトロとしており、珠洲系陶器の大型破片の再利用で、砥石となったものと思われる。



第11図 かわらけ

第10図(図版第8図11~21)は珠洲系陶器の摺鉢の破片で、30点の破片が出土している。摺鉢は口唇部内面に棚描き波状文をもつものが多い(第10図1~4)。第10図11・12は底部破片で、切り離しは静止糸切りである。なお、内面の即目は1が16本を1単位、11・12は9本が1単位と思われる。珠洲焼きの摺鉢で口唇部内面に棚描き波状文があるのは15世紀に多いと言われている。三貫梨出土の珠洲系陶器の摺鉢もこの頃に時間が求められるのではないだろうか。

(3) 常滑系陶器(図版第8図22~25)

常滑系陶器としたのは、外面の叩き目がきれいに整形され、外面の色調が茶色を呈する陶器で、産地同定ができなかったものである。常滑系陶器は39点出土しているが、いずれも裏の胴部破片で、全体を知ることができなかった。なお、外面に自然釉がかかり、緑色(図版第8図22)もしくは薄緑色になっているものもある。また、常滑系陶器と分類した土器の外面に白いブツブツが浮いているものが多い(図版第8図23~25)。胎土に含まれた石類が浮いたものと思われる。

3. かわらけ(図版第9図1~20 第11図)

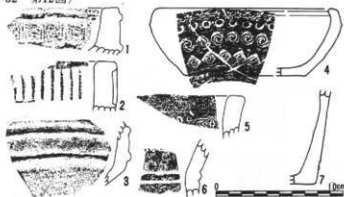
いわゆる「かわらけ」が全体で179点出土している。第11図4は口縁部にススが付着している灯明皿であろう。かわらけの底部切り離しは回転糸切りによるものが多い(第11図8~14)。三貫梨のかわらけを鎌倉旧市域出土のかわらけの分類(註)に合わせて時間的な検討を次に考えよう。服部氏の分類に合わせると第11図7がII群の皿の外は、I群の碗あるいは杯の類であろう。三貫梨のかわらけにIII~V群のかわらけがないこと、5・7・10・12・14が体部・底部壁ともに薄手であること、他が若干厚手であること等が特徴と言えよう。薄手のものは第V期の、厚手のものは第VI期と思われ、15世紀段階のものと考えられる。

4. 瓦質雑器(図版第9図21~32 第12図)

火を入れておく火鉢等の瓦質土器が12点出土している。

(1) 土風呂(図版第9図21~23 第12図1~3)

茶釜を載せるもので、茶の湯で使用する。いずれも口縁もしくはそれに近い部分の破片で、2本の凸帯に囲まれた中に文様がある。1は角張っ



第12図

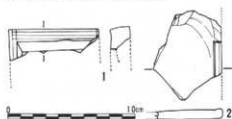
土風呂(1~3)・手あぶり(4)・火鉢(5・6)・瓦器(7)

た雷文の、3は格子目の中に花菱のスタンプ文が、2は簾状の降線が入っている。1・3の色調は白茶色で、2は黒ずんでいた。土風呂は15世紀段階のものと思われる。

(2) 手あぶり (図版第9図24 第12図4)

口縁が若干内側に折れ曲がっている瓦葺の土器で、黒色を呈している。つけられた文様は上から菊花文、連珠の貼付、巴文、雷文で、菊・巴・雷はスタンプ文である。

手あぶりは小さくて、文様が入り、磨きがある点から15世紀段階のものと思われる。手あぶりはこの1点だけである。



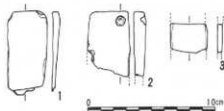
第13図 硯

(3) 火鉢 (図版第9図25~29 第12図5・6)

第12図5・6は火鉢の口縁部、もしくは口縁部に近い破片で、6は口縁が外反するものと思われる。図版第9図27~29は火鉢の胴から底の破片である。火鉢は6点出土している。何れも素焼で、赤褐色に変色している。なお、5は花菱文と唐草文との繰り返しスタンプ文が、6は降線で区画された上部には菊花文、下部には唐草文のスタンプ文がみられる。

(4) 瓦器 (図版第9図31・32 第12図7)

器形が不明な土器で、第12図7は底部より上に凸帯が何か締め付けるようなものでも巡っていたのであろうか、剥落痕の凹みが一周している。土器は縦方向によく磨かれ、内外面ともに黒色処理が施されていた。



第14図 砥石

5. 石製品 (図版第9図33~43 第13・14図)

硯等の石製品が12点出土した。何れも中世の製品であろう。

(1) 硯 (図版第9図33~36 第13図)

硯は4点出土している。いずれも上辺より下辺が短い、という特徴がある。この特徴は中世の硯にみられるもので、三貫梨の硯も中世のものと言えよう。第13図1 (図版第9図35) は海の部分の破片で、ごく細くて浅い線が硯の縁に沿って入っていた。他は墨を搦下ろす陸の部分の破片である。

(2) 砥石 (図版第9図37~41 第14図)

薄くて細い砥石が6点ある。砥石は現在でも畑仕事などの農作業ではよく使用されるもので、時間的な判断は難しいが、鎌倉市域の調査例から薄い点で中世の所産と思われる。砥石は柔らかい石を使用していた。



第15図

銅製掛け金具

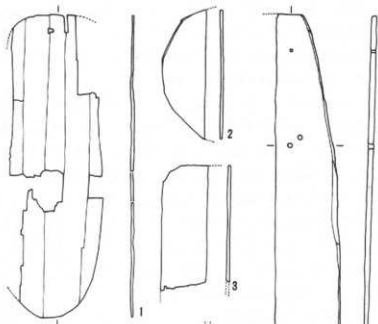
(3) 石皿 (図版第9図42・43)

硯や砥石とは異なり、硬い石で出来たもので、縄文時代の石皿に似ているところから便宜的に石皿とした。名称・用途ともに不明な石製品である。もちろん、中世のものであるのかも不明である。残存する破片は2点で、2点とも原型は楕円形であったのではないかとと思われるように破損していた。底部はやや丸みを帯び、縁が高くせり上がっていた。これは穀類などを摺潰すためのものであろうか。

6. 金属製品 (図版第9図44~46 第15図)

柱穴からの出土品で中世のものであろう。

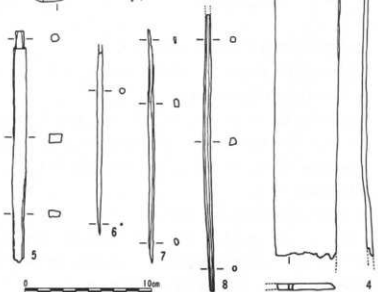
第15図 (図版第9図44・45) は銅製の環状掛け金具で、1は丸みがあり、2は平べったい金具である。46は名称不明のもので、いくつかの金具がかたまっているものと思われる。



7. 木製品 (図版第10図1~14 第16図)

井戸跡の項でも述べたが、多くの木製品が植物遺体と共に出土している。特に第2号井戸は全体量の95%以上にも上る。なお、第3号井戸跡からは全く出土しなかった。

第16図1は板草履で鎌倉市域出土例のような板草履の中心線での



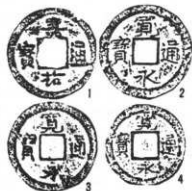
第16図 木製品

割れ目はみられない。特に爪先の鼻緒の穴近くに割れ線がなく、鎌倉とは異なり、一枚板で作ったと思われる。鼻緒の穴は爪先にある2個1対の5mm以下の大きさの穴で、左右の目はきれいに切り込まれている。第1号井戸跡出土である。なお、第1号井戸跡出土品は図版第10図2～4（第16図8）の箸状のものがあるだけである。箸状の木製品は第2号からも出土している（図版第10図8～10 第16図6・7）。これは屋根を葺くときに使用する止め櫓かと考えられる。第16図2（図版第10図5）は曲げ物の蓋か。3も蓋であろうか。4（図版第10図12）には曲線的に切込みがあり、井戸の蓋であろうか。5（図版第10図7）は先端が丸く、下の方が角張っている棒状のもので、先端部の形状から何かの軸かと思われる。図版第10図13はホゾ穴が開いている角材である。天か地で柱等を支えたものであろう。井戸跡出土の木製品は十分な検討を加えなかったこともあって、名称・用途等が不明なものが多い。図版第10図14もそのひとつで、楕円状の材としか理解できなかった。

なお、図版第10図15・16は柱材で、15はP40、16はP79の柱である。柱はこの外にも多くあるが、代表的なものとしてこの2本を掲載した。柱の端部は斧もしくは手斧状の工具で切り取られている。

8. 銭貨（第17図）

銭貨は全部で13枚出土した。その多くは寛永通宝で、11枚出土している（第17図2～4）。外には嘉祐通宝が1枚第3号井戸跡の下層から出土し、もう1枚は面の汚れで、銭種は不明である。第3号井戸跡出土の嘉祐通宝はいわゆる北宋銭で、第3号井戸が中世のものであることを裏付けている。



第17図 銭貨

9. 近世陶磁器（図版第10図17～26）

これまでみてきた三貫梨造跡第2次調査出土品は、ほとんどが中世のものである。近世の出土品は銭貨の外に、これから紹介する陶磁器があるだけである。近世磁器は18世紀以降の有田焼きが主体的で、出土量は全体でコンテナ1／3分である。図版第10図17～19は薄い茶褐色の地にくすんだコバルト色の絵が描かれている。京焼き風の磁器である。20～22は唐津焼きで、20は水色がかかった灰色の釉が高台内の外底面を除いてかかっている碗である。21・22は波状に釉薬をかけている湯呑であろう。23・24は銅緑釉の碗で、17世紀の佐賀産のものであろう。25は薄水色を呈する香炉で、18世紀の有田焼きである。有田の香炉はこの外に2点出土している。26は仏壇などにご飯をお供えする仏飯器で、18世紀以降の有田焼きである。

註 服部実喜「鎌倉市域出土の中世土師質土器」『中近世土器の基礎的研究』所収 昭和60年

V. ま と め

三貫梨遺跡第2次調査地は伝説の大銀杏の付近で、東西の堀に囲まれた中に掘立柱式建物跡1、礎石柱建物跡2、井戸跡3それに多数の柱穴が発見された。この内、礎石柱建物跡は前に述べたように近世の地藏堂であろうと思われる。外の掘立柱式建物跡・井戸跡などは出土遺物から中世の遺構と考えられる。ここではこの中世の遺構を中心に考えて行くことにしたい。

中世の遺構はほとんどが約86mの距離をおいた堀で囲まれているが、これは取りも直さず一単位の屋敷内を区画しているといえよう。が、調査範囲がバイパス法線に限定されているため、南北の堀についての調査は出来なかった。しかし、南は栢吉川に面する崖が、北は大銀杏の北に入る沢が、それぞれ天然の堀になっていたのではないだろうか。この間の距離は約100mで、三貫梨の屋敷は約8,600平方メートルの面積を持っていたと考えられる。

次にこの屋敷の性格を検討しよう。屋敷内からは青磁の碗、白磁、香炉、仏華瓶、硯などが出土している。また、茶道で使用する土風呂や天目の出土も注目される。これらはこの屋敷が中世の武家もしくは名主クラス、あるいは寺院などが考えられる。その中でも、香炉が複数出土していることから、三貫梨の屋敷はどちらかといえば、寺院跡に近い性格のものと思われる。しかし、より明確な仏具などの遺物が出土していないこともあって、積極的に寺院跡とする決め手を欠いている。ところで、第1号建物跡には柱の燃え残りがあり、火災にあったと思われる。火災の原因は過失による失火、戦の兵火、放火などが考えられる。その外に、中世の紛争解決の作法にのっとった場合もあろう(註1)。いずれにしても寺院に近い性格を持つ三貫梨の屋敷は、1棟が火を受けて焼失し、その際にはごく近くにある第2号井戸跡も燃えてしまった可能性もあろう。

また、三貫梨の屋敷は中世と推測されるが、より細かな時間は青磁の碗の多くや、瀬戸焼き、珠洲系陶器の摺鉢、白磁、天目、かわらけ等の土器類や、土風呂などの年代観が15世紀の中に含まれることから、この頃に求められよう。15世紀といえば、栢吉地区に關係する歴史的な概略は、古志長尾氏が藏王堂城からその根拠地を栢吉に移す直前で、伝説の金原大膳につづる金原新右兵衛の名が出るのが15世紀後半であること、それに三貫梨墳墓が15世紀から16世紀にかけてであることなどは、第1次調査の報告書(註2)でみた通りである。

三貫梨第2次調査で発見された屋敷についての十分な検討を加えることは出来なかったが、ここでは15世紀段階の寺院に近い性格をもつ屋敷跡であるとだけ、伝えるにとどめたい。

註1 藤木久志「身代り・わびごとの作法」月刊百科6 No.284 昭和61年

註2 駒形敏朗他「三貫梨遺跡—第1次発掘調査—」長岡市教育委員会 昭和61年



遺跡遠景（東から）



遺跡近景（東から）

道 跡



表土発掘



遺構発掘

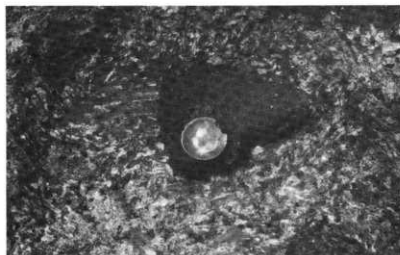


第2号井戸発掘

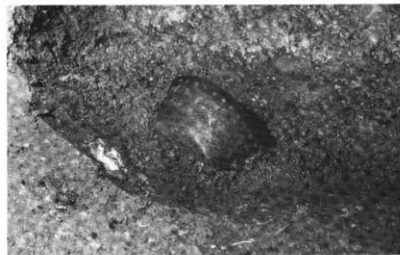
調査風景



瀬戸系菊皿



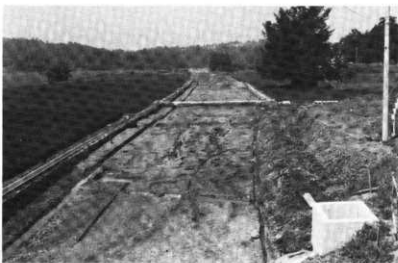
かわらけ



手あぶり

遺物出土状況

図版第4図



調査区全景



46~49 G 付近



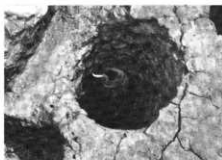
49・50 G 付近



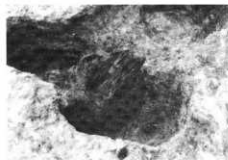
P 3



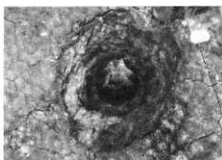
P22



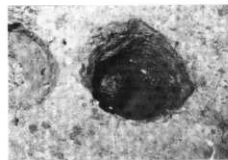
P40



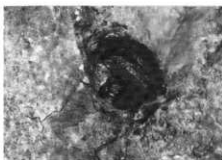
P68



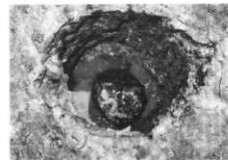
P79



P94

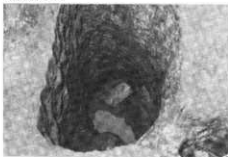


P95



P98

図版第6図



第1号井戸跡



第3号井戸跡



第1号掘跡 (土層断面)



第2号掘跡 (土層断面)



第1号掘跡 (北から)



第2号掘跡 (北から)



第1号掘跡 (西から)

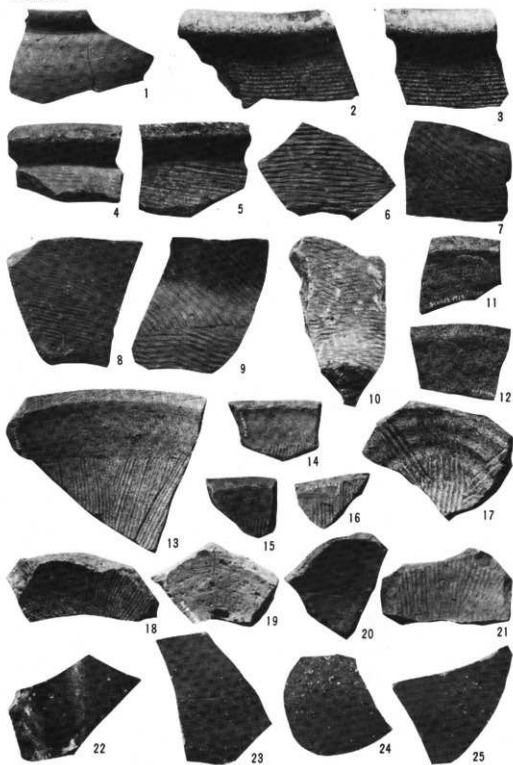


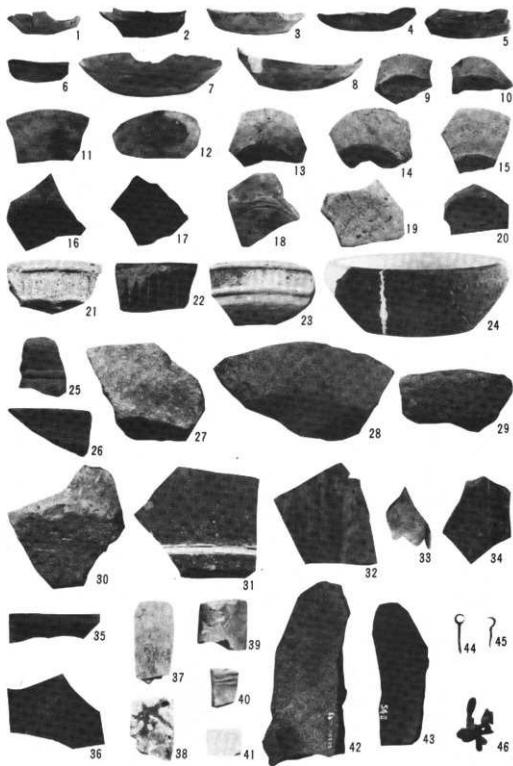
第2号掘跡 (西から)



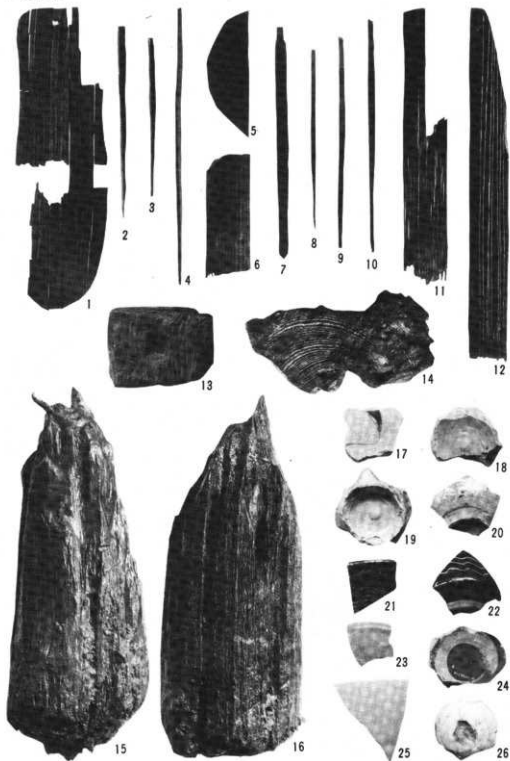
中国・国内産陶磁器

青磁(1~19)・白磁(20~28)・染め付け(29)・天目(30~33)・瀬戸系陶器(34~52)





かわらけ(1~20)・土風呂(21~23)・手あぶり(24)・火鉢(25~30)・瓦器(31・32)・
 硯(33~36)・磁石(37~41)・石皿(42・43)・金属製品(44~46)



木製品(1~14)・柱(15・16)・近世磁器(17~26) [11~16は約1/4.5、他は約1/3]

三貫梨遺跡

— 第2次発掘調査 —

昭和62年3月20日 印刷

昭和62年3月30日 発行

発行 長岡市教育委員会

印刷 総合印刷 KK 中越

長岡市学校町3-9-5